

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401、044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 89 号

宗像・沖ノ島関連遺跡群世界遺産認定への動きについて思う

=====安易な認定は日本文化崩壊のきっかけとなる=====

宗像大社・沖ノ島のもつ大切な意味とは

今年の 8 月、文化庁文化審議会は 2017 年に登録をめざす世界遺産候補に「宗像(むなかた)・沖ノ島と関連遺跡群」を推薦することに決定しました。ここ数年の間、日本では群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」をはじめ、いくつもの世界遺産が誕生しています。

認定された遺産だけではなく推薦されながらも残念ながら落選したものも含め、一連の動きをきっかけに国内外の多くの人々に注目され、観光客も増加しています。

しかし、日本の文化を世界に紹介する事の問題点も十分に存在することをしっかりと心にとめておかなければなりません。

それは、第 1 に、遺産としての価値がどこにあり、どのような意味を持っているのかを、より多くの人々が理解していなければ、世界遺産としての意味がなくなってしまいます。世界遺産である以上、しっかりとした保存への体制が確立され、国民が一致して遺産の意義を認識することが大切なことと思います。第 2 に、各国で文化に対する考え方や感性の相違があるということをしかりと理解することです。以前、柿生文化 61 号にも書きましたが、富士山と周辺の景観に関する事や鎌倉についての文化的価値感など、日本人と外国人の感性の相違が大きなギャップになっていることを指摘しました。これは逆に海外の文化遺産に対する日本人の考え方、捉え方にも関係します。文化に対する考え方は、それぞれの国民、民族、地域等によって異なる事が多いようです。それは単に、大きいから、美しいから、古いから等と言うレベルのものではありません。背景にある自然環境、そして文化を形成してきた人々が積み重ねてきた歴史、情緒、信仰など、そこには実に複雑な感性が幾重にも重なりあって形成されてきたものです。まさにそれが文化であるわけです。したがって、自国はもとより他国の文化の本質を理解するという事は、かなり大変で難しい事なのであると思います。

そこで、今回、話題になっている「宗像大社」「沖ノ島」はどういう意味のある文化遺産なのでしょう。この辺をよく熟知しておかないと、承認されて「よかったね」「外国からの観光客が増え経済効果が高まるぞ」等という実に単純で打算的な発想だけでこの問題を考えることになるのです。それはやがては日本の貴重な文化を破壊してしまうことになるのです。

(1)宗像・沖ノ島とは----- 宗像大社は沖ノ島の沖津島社殿(祭神:田心姫神=たごりひめかみ)、宗像大島の中津宮社殿(祭神:湍津姫神=たぎつひめかみ)、福岡県宗像市辺津宮社殿(祭神:市杵島姫神=いちきしまひめかみ)の 3 社を併せて呼ぶ名称です(各社殿の位置は写真 A 参照)。その中でも特に沖ノ島(写真 B)は福岡市の沖合約 60 キロ、対馬から約 75 キロの玄界灘の真ん中にある小島で島全体が御神体で、人々から神として崇められている「神体島(しんたいとう)」と言われるものです。日本には他にもいくつこの神体島があります。例えば瀬戸内海の大三島や伊勢湾に浮かぶ「神島」があげられます。一方、山そのものを神として祀っている奈良の三輪山も有名です。いずれも日本の古来から伝わる信仰のスタイルで自然崇拝といわれているものです。



写真 A 宗像三社の位置

この島の出土遺物を見ますと縄文時代から人々の生活の営みがあったことが確認されています。さらに弥生時代から古墳時代、奈良時代、平安時代の祭祀に関する遺物があるままの状態に残っているのです。約 2 千年近く前の古代日本人の信仰の姿や生活の様子までがタイムスリップしたかのように私たちの前に現れてきます。さらにその信仰形態の一部は今日まで継承され、守られてきている事には、驚きとしか言いようがありません。

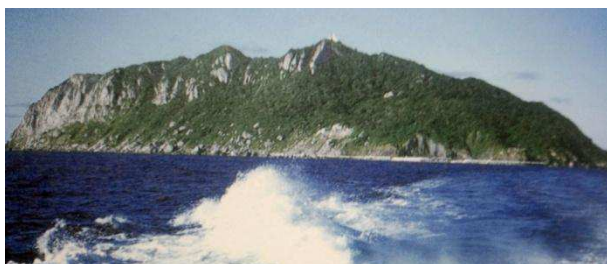


写真 B 沖ノ島

今回は、沖ノ島の遺跡に浮き彫りにされた古代祭祀の姿や夥しい遺物から分かること、さらに大陸とのつながり、そしてこの島の遺産をどのように保存し、守っていかねばならないかという事でも考えてみたいと思います。(参考資料:「古代祭祀とシルクロードの終着地」新泉社) (文:板倉)

←新しくホームページが開通いたしました。どうぞご利用ください。なお旧ホームページのアドレスも残っていますのでご注意ください。

シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第 59 話

麻生の寺院(9) 浄行寺・長福院・妙福寺

小島 一也 (遺稿)

前稿第 58 話、常安寺の開基小島佐渡守高治には、玄蕃貞治という兄が居りましたが、戦乱の世のこと、病弱のため家督を弟高治に譲り下麻生に隠居しています。その隠居所が新編武蔵風土記稿で謂う「古蹟、陣屋跡(=現マブネ協会辺り)」で、この隠居所の裏鬼門に造立されたのが、今は幻の寺となっている「浄行寺(じょうぎょうじ)」で、新編武蔵風土記稿では「寮」の項に、「浄行寺と号す、二間半に三間の寮なり、本尊三宝を安ず、日蓮宗多摩郡三輪村妙福寺の持」と記しています。

現在この地は、小島家一族をはじめ、下麻生在家の広い墓地となっており、そのほぼ中央、古い墓石の中の姿を少々傾けた五輪塔が浄行院(玄蕃貞治)の墓石なのでしょうか。今は寺(寮)の形跡は微塵もなく、ただ墓地となった「寮」の下に、今でも「堂の下」と呼ぶ旧家の屋号が残っています。

上麻生の大ヶ谷戸(柿生駅前)と真福寺境(柿中北)に、「長福院」という法華宗の寺があるのをご存知でしょうか。ここはその昔「下駄切坂」と呼ばれた交通の難所に建てられた寺で、新編武蔵風土記稿には記録がありませんが、伝承によると、享保十六年(1731)日蓮宗信仰に篤い上麻生大ヶ谷戸の在家(旧家)鈴木家一族の菩提寺として造立されたといわれ、今は無住(僧侶不在)ですが、境内墓地には歴代上人の墓石 12 基が保存され、現在三輪妙福寺の末寺となっています。(福島県白河へ移った伝承もあります。)



長福院

この三輪の妙福寺は、現在は町田市で行政区が違いますが、元は都筑郡麻生郷で、新編武蔵風土記稿によると、「本領五石、日蓮宗荏原郡池上本門寺末、長祐山と号す、本堂十間に七間半、本尊三宝を安ず・・・」と記され、寺伝縁起によると、開山は遠州身延山久遠寺八世日億上人、明徳元年(1391)創建とされています。

町田市史によると、現在市内の七堂伽藍の大刹は、一に小山田の大泉寺(第 26 話)、二に三輪の妙福寺、三に本町田の宏善寺(常安寺院主実家)と謂われ、妙福寺本堂内陣には日蓮上人御直筆など秘像があり、高麗門(総門)、鐘楼門は町田市の文化財に指定されており、寛文十二年(1672)池上本門寺から移築された祖師堂(日蓮上人像安置)は桃山時代の建築文化を伝える意向で、東京都の重要文化財に指定され、昭和 42~44 年に亘り茅葺屋根が現在の銅板葺きに改造されましたが、今でも内陣高欄には極彩色を施した跡を幽かに見ることができます。

その昔、同じ麻生郷であったこの妙福寺は、池上で妙法に皈依したという常安寺(第 58 話)の開基小島家の菩提寺であり、そして前記下麻生の浄行寺(廃寺)、上麻生の長福院と麻生三寺の法灯の流れを今に灯しており、そして毎年大晦日、この妙福寺鐘楼から鳴る除夜の鐘は、人間国宝香取正彦氏作(昭和 36 年)だそうです。



浄行寺跡の墓地

長福院の開山開基はわかりませんが、この鈴木氏といえば前稿 34 話の熊野信仰、熊野の鈴木氏で、現柿生駅前に熊野大権現社を創建、護持してきた氏族ですが、熊野信仰は「神の本地は仏」とのことで、時を経て法華経に帰依、「長福院講」と呼ぶ日蓮宗信仰の集まりを持ち、前記妙福寺の檀徒となっていますので、妙福寺の僧により開山され、開基は享保の時代の講の長だったのでしょう。

長福院の開山開基はわかりませんが、この鈴木氏といえば前稿 34 話の熊野信仰、熊野の鈴木氏で、現柿生駅前に熊野大権現社を創建、護持してきた氏族ですが、熊野信仰は「神の本地は仏」とのことで、時を経て法華経に帰依、「長福院講」と呼ぶ日蓮宗信仰の集まりを持ち、前記妙福寺の檀徒となっていますので、妙福寺の僧により開山され、開基は享保の時代の講の長だったのでしょう。



妙福寺本堂

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「ふるさと麻生」「ふるさと三輪」

シリーズ

時間と時計の話 第 1 部

和時計と西洋時計 (4)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆ 日本人の時の観念 ◆

ただ 1 人、師の芭蕉のお伴をする栄に浴した曾良は、師との旅の詳細を自身の旅日記に記しています。そこには、道中の時間も正確に記述されています。こんな記述があります。「18 日卯の刻 (午前 6 時前後) 地震があった。辰の上刻 (午前 7 時台) 雨あがる。午の刻 (正午頃) 宿を出る。」こんな調子です。

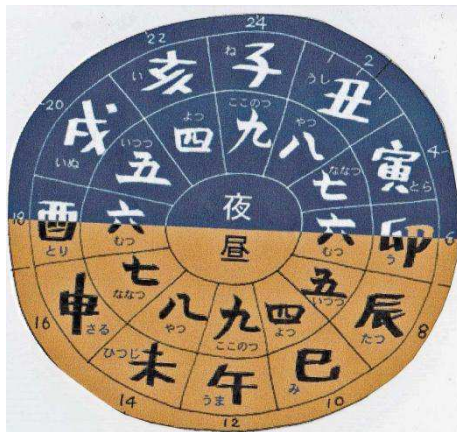
当時、懐中用の日時計は、既に使われていたのですが、雨上がりの時刻を見るとなると、日時計は役に立ちません。日時計そのものは、江戸時代以前から使われていましたが…。

曾良はどうやって、時を知ったのでしょうか。どうやら曾良は、お寺の鐘を聞いて、時を知ったようなのです。ペリーが驚き、感動したのは 1850 年代 (19 世紀中ごろ) の話ですが、17 世紀の末頃には、江戸のような大都會ばかりでなく、全国各地の寺という寺で、時鐘が響き渡っていたと考えられるのです。奥州のような都から遠い地方でも、ほとんどの寺が鐘つき堂を用意し、正時毎にゆったりと鐘を撞いていたのです。

詩人の中村雨紅さんが作詞した、「夕焼け小焼けで日が暮れて、山のお寺の鐘が鳴る…」と続く童謡の名曲『夕焼け小焼け』の歌、皆さんもご存知ですね。この童謡が作られたのは、大正時代なのですが、この時期山寺の鐘はいくつ撞かれていたのでしょうか。現在では聞かれなくなりましたが、1980 年頃までは、朝夕に鐘を撞くお寺は各地に残っていました。ただ、昭和も後半の時代には、撞く鐘の数はマチマチになっていたようです。

しかし、かつては撞く鐘の数は決まっていた。夜明けと日暮れを告げる鐘は六つ撞かれていたのです。明け六つに暮れ六つです。既に江戸時代、お寺の鐘は時報の役割を果たしていたのですが、既に不定時法を離れて定時法に移行していた近代日本でも、鐘の撞き方については、なお古くからの伝統が守られていたのです。

定時法では、1 日は 24 時間と定められていますが、日本では古く 927 年制定の『延喜式』の時代から 1 日を 12 刻、12 支の名を用いて、子の刻から亥の刻まで、12 刻に分けていました。即ち、深夜 0 時、日付の変わる刻限を中心とする約 2 時間が子の刻、午前 2 時前後の約 2 時間が丑の刻という具合に…。「草木も眠る丑みつ時」とは、丑の刻を (午前 1 時~3 時) を 4 分割した三つめ、午前 2 時からの 30 分を指していました。以下、寅の刻、卯の刻、辰の刻、巳の刻、午の刻…と続き、夜の 10 時前後の約 2 時間が亥の刻となって、子の刻に戻るのです。ただ、当時は不定時法をとっていたから、春秋の彼岸前後を除くと、昼と夜の長さは違っていました。ですから、子の刻も午の刻も、みな約 2 時間という意味で、正確に 120 分を指すわけではありません。



江戸時代の時刻表示 (子の刻は 23 時~1 時、子の正刻は午前 0 時)

ところで、明け六つとか暮れ六つというのは、何を意味したのでしょうか。これは鐘を撞く数を指していました。子の刻は、鐘を九つ撞くのです。以下巳の刻まで撞く鐘の数は一つづつ減ってゆきます。丑の刻は八つ、寅の刻は七つ、そして卯の刻は六つ、辰の刻は五つ、巳の刻は四つです。そして正午を挟む午の刻は九つに戻り、また亥の刻まで、一つづつ撞く鐘の数を減らしてゆくのです。ですから、朝 6 時頃と、夕方 6 時頃に撞く鐘は、明けの六つに暮れの六つとなるのです。まさしく明け六つに暮れ六つですね。半刻の時間は、曾良の旅日記が辰の上刻とか卯の下刻と記しているように、上刻に下刻と表現されるのが常でした。

江戸時代の日本は、幕藩体制と呼びならわされているのですが、17 世紀の中頃の日本には、徳川幕府の下に、全国におよそ 260 近くの藩が置かれていました。そのうち約 60% は、5 万石未満の小藩でした。当時は石高が 5 万石を超えると城を持つのが通例でしたから、所領に城を持たない大名の方が多かったのです。城を築いた 5 万石以上の藩では城を中心に、城を持たない藩でも藩主の居館を中心に、城下町が形成されます。そこでは藩主に仕える家老以下の武士たちは、城近くの武家屋敷に住み、毎日城勤めに上がることとなります。城は藩の行政センターであり、現在の市役所や県庁の機能を担っていたのです。武家屋敷は官舎でもあったのです。

さて、こうした武士たちの勤務時間はどうなっていたかという、どの藩でもほぼ共通しているのですが、およそ辰の正刻 (午前 8 時頃) に登城して仕事に就き、退出時刻については、はっきり決まっていなかったのですが、おおよそ午前中が勤務時間で、午後は各自の勝手となっていたようです。こうした武士たちに出勤時間 (お城への登城時間) を知らせる役割を担ったのも、鐘や太鼓でした。

城には、登城の合図に使われる大太鼓も備えられていましたが、この大太鼓が登城を告げるのは、常とは違う非常の際など、特別なケースに限られていたようです。

(続)



奥の細道を行く芭蕉と曾良

平成 27 年度 サマースクールが無事に終了

8 月 1 日に行われたサマースクールは総勢 59 名の参加をいただいて無事終了しました。

今回は地元王禅寺在住の陶芸家内野勝雄先生に講師をお願いして「縄文土器を作ろう」と題して開催されましたが、みなさん、なかなか手際よく作業を進められ、最後には立派な縄文土器が出来上がっていました。

久しぶりの親子共演（協演？あるいは競演？）の方々も多く見受けられました。

よい自由研究となれば幸いです。



柿生郷土史料館 10・11 月催物ご案内 (入場無料)

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月 4 回)

10 月 3・10・24・31 日 (毎土曜日) **11 月** 8・15・22・29 日 (毎日曜日)

◎開館時間：午前 10 時～午後 3 時 (10 月 17 日、11 月 1 日は休館です)

第 57 回 カルチャーセミナー

明治期以降における 柿生周辺地域の養蚕について

柿生の里は、禅寺丸柿や黒川炭の生産で知られますが、幕末～昭和前期においては、養蚕・生糸の生産も盛んで、都筑周辺地域の中では、最も生産高が高かった歴史を持ちます。

現在はその実態がほとんど忘れ去られようとしていますが、地元で、もはや数少ない実体験の様子を豊富な実物資料とともにお話しいたします。

講師：中溝正治氏

日時：10 月 31 日 (土) 午後 1 時半～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室

(当初お知らせしていました 17 日が、休館となりましたので日程変更となっています。)

第 9 回 特別企画展

「江戸名所図会」に見る江戸と川崎

江戸名所図会は幕末に近い天保年間に刊行された江戸並びに近郊の川崎、横浜、大宮、船橋などを含めた町の地名由来や、名所を紹介する観光案内書です。同時に寺社仏閣の由来から祭礼風俗にまで及ぶ記述は、単なる観光案内を超えた貴重な文化風俗資料になっています。

今回は初版本全巻揃いを、千代田区立図書館のご好意で拝借して展示いたします。

期間：10 月 31 日(土)～1 月 10 日(日) 会場：柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！

ふるさと柿生の記憶を DVD 化

第 1 弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは資料館までお問い合わせください。